特集

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと6

「遊ぶ」ことは「学ぶ」こと？

インタビュー

小川博久（おがわひろひさ）氏

東京学芸大学名誉教授。
前日本保育学会会長。主な著書に『保育者論』（樹書房、2000）、『遊び保育論』『保育援助論』（ともに萌文書林、2010）他多数。

保育・幼児教育の世界で、あたりまえのように、大切に使われている言葉、少なくありません。今回はその中でも、大切中の大切、「遊び」を取り上げます。保育所や幼稚園などの集団の中での遊びについて「遊び保育論」という著書も書かれている小川博久先生にお話を伺いました。

早口でユーモラス、そして刺激的でもある話しぶりに引き込まれ、あっという間に時間が通り過ぎていったインタビューでした。現場で実際に保育する人に伝わる、そこに生きる子どもが活き活きとする理論を追求し続けてこられた方のお話だと実感しました。

（編集委員会）

聞き手　浜口順子（お茶の水女子大学大学院）

幼児教育の世界へ

浜口　先生が幼児教育の研究を始められたきっかけはどのようだったのですか？

小川　僕が北海道教育大学から東京学芸大学の幼稚園課程に赴任した時、幼児教育は本当に素人でした。ちょうどブルーナーの研究をやっていて、『play』というペンギンブックスから出ていた本を読んだりもして、遊びのことをやりたいと思ってたんですね。最初の幼児教育との出会いは、津守（真）先生の『保育の体験と思索』なんですよ。感動したのね。

浜口　お茶の水女子大学附属幼稚園の話ですよね。

小川　そうそう、それです。三年間附属に通いつめて考えたことが書いてあって、「よし、俺もこれからは現場に通おう」と思ったわけです。それで、ちょうど自分の子どもが出来たんで、僕が先に帰って二人娘の面倒を見たり、一緒に遊んだりすることがあった。そのころちょうど番町幼稚園に実習巡視に行った。それで子どもと遊んじゃったわけ、僕が。そして、相撲とったら子どもがやんちゃで、僕のワイシャツのボタンを三つくらいバーっと取っちゃった。そしたら、幼稚園の先生が感動して、「大学の先生で子どもとこんなにアホみたいに遊ぶ人は珍しい」って言われた。それからいろいろな所の園内研修に口コミで呼ばれるようになって、足しげく現場に通った経験から書いた本が、最初の『保育援助論』なんです。

　子どもが保育室で遊んでいる。他の子どもは室外で遊んでいるから外にも行く。その、外へ行って戻ってきた時の保育者の入り方。部屋の子どもがどういう状態であるかを確認して外に行って、帰る時に、さっきの子どもの動きはどう変化したかなっていうふうに思う保育者は、テラスのところでいったん止まって、中を見てから入る。ボーっと入っていくのと違うんだ、っていうようなことを、僕は現場の保育者を見ながら気付いたわけです。

浜口　保育者の見方を見ていたのですね。

小川　私はやっぱり教育学だから、子どもと同時に、

保育者のかかわり方が気になるわけです。私の遊び研究は、大人がどう遊びにかかわり得るのかということが基本にあるんです。

本来、遊びっていうのは子どもがやるものでしょう。大人って、もしかしたらお邪魔虫じゃないかとね。最終的には子どもの自己決定性で、遊べるようになったら先生はお呼びでない、その場から引き揚げるべきだ。それは知らん顔するのではなくて、見る側に回るべきだっていうのが、ずっと自分の基本的な態度なんですね。大人は子どもと一体化するということはあり得ても、どっかで保育者である以上は、大人の、教育者としての顔が出てくる。その場合に、いったいどこまでかかわって、どこまでかかわることができないのか、みたいな関心が私の中に最初からあるんですよ。

どんなにすてきな保育者でも、子どもになりきることはできない。「お帰りの時間ですよ」とか言わなきゃいけないじゃないですか。役割の自覚ってのが大事だというふうに思っていて。

浜口　幼児期は伊豆大島にいらしたのですね。

小川　その前は東京の武蔵境にいたんです。立川で生まれて。親父が小学校の教員で、大島に転勤に。幼稚園には行ってないです。五歳から中学三年までいたんですね。大島に行っても、独りぼっちで、遊び相手がなかなかいないんです。でも、自然の中で、大人たちが漁場に出る前に船の上でしゃべったりするのをじーっと聞いてたり、海を見てたりするのが好きでした。高い木に登るのも大好きでしたから、サクランボを採って親に注意されたりすることがよくあった。大島の島桜っていうのはサクランボがおいしいんですよ。だから、大島の遊び体験というのが、私の根っこにあるんです。遊びっていうのは、本来、自分たちだけでやるもんだっていう意識が僕の中にあって。

浜口　十分遊んだっていう記憶が……。

小川　それはもう、中学三年の三学期まで遊んでましたからね。それでまた、親が心配して越境入学させたわけですよ。行った先が、親父のふるさとに近

い伊豆の静浦という所なんです。静浦中学は三か月しかいなかったんだけど、いまだにそこの親友と付き合ってます。行った先の親戚のおじさんが、これが面白い人で、話せば切りがないんだけど、網元の次男坊で、世界を放浪した後、終戦後アメリカから強制送還され故郷で漁師をしていた。そのおじさんが沖に出ると、朝帰ってきて「イワシを取りに来い」って言うんですよ。朝五時に起きて行くわけ。片口イワシを水で洗ってさらして食べるとか、シラスを生で食べるとか、忘れられない経験です。そういう原体験がある。おじさんは酔っぱらうとスペイン語が出てくるんです。本当に男っぽい人でしたけどね、私のことを息子みたいにかわいがってくれて。

遊びは「遊動」

浜口　大学では教育学を専攻されたのですね。

小川　教育方法学です。しかし、私の好みは教育学よりも……教養学的でした。映画を見たり、小説を読んだりすることが好きでした。私の中で遊びを研究するっていうのは、とにかく、学校教育がもっている教授的でリジットな関係をどうしたら子どもの自己解放にしていけるか、そういうことだった。最初のころ、守屋光雄さんの北須磨センターに行った。あそこは、非常に奔放な遊びをやっていた。三歳の子どもが、がけを登っていて、途中で怖くなっても、後から他の子がどんどん登ってくるので「うわーっ」て泣いて上がるしかない。けがすると「○ちゃん、メンソレータムつけてあげるから」って、そういうふうです。それで僕は感動してね、その時、子どもの遊びは自己を無限に解放する、という主旨の論文書いたら、守屋先生が面白いと言ってご自分の著書に入れてくださった。でも、今はちょっと考え方が違ってきたんです。

最初、うちのかみさん（小川清実氏）が遊び研究やってたんです。で、私も遊びの研究をやってたので、テーマが一緒になっちゃった。鬼遊びの研究で、そこで遊びとして魅力を感じたのは、追う追われるっていうのがアンビバレントになっていて、「捕まり

たい」「捕まりたくない」の両義性だということ。そういうところに、遊びのもっている非常に大事なスピリットがあるんではないかということが、私の基本的な遊び観です。

この本（小川・岩田遵子共著『子どもの居場所を求めて』）に書いたのだけど、高橋勝さんが言う「遊動」っていう概念。これがないと遊びっていうのは成り立たないんじゃないかと。つまり、揺れるんですね。捕まえたい、捕まえたくないっていうような。それは子ども期にわずかにあるだけで、学校教育、つまり労働になったらない、というのが高橋の言い方なんです。私は、シリアスなアクティビティの中にも「遊動」というものがあると考える。それは一種の価値の宙吊り状態で、捕まえたくない、捕まえたい、というような状態。

浜口　それはどんなに小さい子どもでもありますか。0歳の子どもでも？

小川　あります。0歳なんかの場合は、一番基本は「いないいないばあ」ですよね。「いないいないばあ」っていうのは、親のもとに、親の作用圏の中にあって、親の規範の中で安定するわけです。で、そういう親が消えるわけ。消えて現れる。ここに子どもの「遊動」があって、だから「遊動」っていうのは不安と、幸せの、行ったり来たりなんだな。

遊びの学習っていうのは、見てまねるんですよ。そこに学びの基本がある。見てまねる場合にはモティベーションが学習主体の側にある。遊びがうまい、っていうのは、目利きであり、状況察知であり、直観知がないとできないんですよ。その直観知というのは、遊びの中で身に付ける。子どもの伝承遊びの中で、目隠し鬼ってあるじゃないですか、「鬼さんこちら、手のなる方へ」ってね、これなんかは一種の直観知ですよね。こういう能力を身体で習熟していく。僕は小さい時によく、山菜を採りに行ったり、自然薯掘りに行ったりしたけれど、どこに自然薯が

あるかって探す時にムカゴ探すわけですよ。小さなムカゴがある。そこを見るとそこら辺を掘ると太いのがある。これなんかは非常に探索的なんですね。こういうのが、自分の中ですごく、大好きで。今でも、自分の研究であんまり文献実証主義的なのは好きじゃない。つまりextrapolation（外挿）ですよね。学生の論文指導で「この辺ねらってみ、ここを。探してみ」とか言って、当たったりするとうれしい。

異年齢で遊び、見てあこがれてまねる

浜口　幼小をつないでいく学びのとらえ方と関係がありそうですね。

小川　はい、人間の学習っていうのは、近代になってから、本を使って学ぶ、文章で学ぶ。言葉で教えられて学ぶんですよね。一方で、少なくとも前近代社会の場合には、体で覚えていきますから、常に見てまねるわけです。職人なんかは「勘どころは教えられない」というし、歌舞伎役者とかは今もそう。近代社会になってから、本中心の「教えられる文化」になってきた。教えられる文化っていうのは、大量生産です。基本的には、子どもたちはサバイバルするためにどうやってお水飲んだらいいか、食べたいものをどうやって食べたらいいかとか、見て学んだんです。そういう能力を、教えられる文化が肥大化する中で、どんどん抑圧されてきた。

浜口　現代の幼児教育において学びはどうなっているでしょうか。

小川　今の保育では、保育者っていうのは援助者であることを越えて教授者になってしまっている。ところがね、子どもは遊びの中で、見てまねたいんです。保育者はモデルであるべきです。僕が何で今の保育に不満をもってるかっていうと、昔の伝承遊びの研究をやったり、子どもの遊びに参加したりしてきたからです。

昔小さかった時、近所の小学生が野球をやっていると、私はみそっかすだから、入れてもらえず見ていた。人数が足らなくなると「面子（めんつ）が足りねえんだよ、誰か……」。そうすると「下手くそだけど、あいつ

しかいない」とか言ってイヤイヤ入れてもらえる。僕はうれしくてしょうがないわけ。そうすると「お前ライト」って。球が来ないからね。それからバッター九番だよね。「かぶれ、かぶれ！」って言われる。デッドボールで出ろっていうこと。そういうのが、一年生になるとちょっと言われなくなる。二年生になると、センターくらいになる。四、五年生になると、内野になる、ね。打順も三番とか四番とか。六年生になると、ピッチャーになるんですよ。こういう伝承遊びを、僕は体験している。

昔の伝承遊びの研究だとね、各家できょうだい多いじゃないですか。お兄ちゃんがちっちゃい子、連れてくるのね。子守で。子守兼遊びだから。そうすると、校庭に来た時に、高学年なんかはみんな幼児連れて来るわけ。でも幼児は遊びにならないからみそっかすで、そこに置いとくわけです。置いといて、自分たちだけでやるわけですよ。だからさっき言ったように、人数が足りなくなると入るわけですよ。こういうシステムを、僕はずっと研究していたのだけど、その中でだんだんわかったのは、一番年長さんがあこがれの的なんです。あこがれてるだけじゃうまくならないけど、入れてもらった時に自分よりちょっとうまいやつが一年生か二年生。見てまねる対象がちょっと上の子ども。あこがれが二重になるんですよ。学習目標が。つまり、あこがれの先輩と、見てまねる先輩と。しかも、日常生活では、そのお兄ちゃんたちは、おしっことか、泣いた時なんかにケアしてくれるんです。ケアして、求心的に集団をつくっていく。ところが、遊びになるとほかされる（放置する）わけ。つまり、集団に入れながら、ほかすわけですよね。求心力と遠心力とが同時に働き、仲間に入れても、いざという時はほかされる。そうすると距離が出来る。仲間に入れられながら距離が出来るという構造によって、年下の未熟な者はどうしたら早く上のほうに行けるか、というふうに考えて、それが学習過程になっているわけです。いろいろ調べてみると、結局、徒弟制度と同じなんです。徒弟文化なんですよ。

生田久美子が「威光模倣」って言っているけれど、年長は何か輝いてるからあこがれてまねしたくなるという働きが生まれるわけです。この異年齢社会における見てまねる文化っていうものが、昔の、遊びの仕組みだったんじゃないかと思います。異年齢で遊ぶことがなくなってきた、だから遊びがだんだんなくなるわけです。同年齢だと、遊びの幅が狭いんですよ。持続性がない。昔はずっと同じ仲間で長い時間遊んだ。同じ場所に毎日集まって、ケアされて、見てまねるわけです。こういう文化がなくなった。

こういう遊びを保育の中に生かせないかと考えて、今から十五、六年前から現場に入ったわけです。最初は保育に入るの、怖くてね、でも自分がやってみたわけ。最初は年少さんの四歳くらいの子どもと遊んだ。まず一番いいのは粘土なんですよ。粘土っていうのは、身体のコンセントレーションを出せるわけです。大きな粘土の塊をバーンとたたいてやり始めると、子どもが入ってくる。ある時は、小学校の林間学校で手打ちうどん作ることになった。子どもがワーっと来て「やらせろ」って言う。「駄目だ」と答えると「何でやらせねえんだ」って子どもは言う。「これ、失敗したら食えなくなるんだよ。それでもやるか？」って。子どもはビビるわけ。それでもじーっと見て、「やらしてくれ」って言うんだよな。「あのな、昼飯だよ、失敗したらみんなの昼飯抜きになるぞ、それでもやってみるか？」って言うと、やるんだよね。保育者が、テクニックじゃなくて、あこがれの存在として、子どもに対する引力関係を生み出すこと。教えるというおせっかいをせず、幼児の関心を引き付ける。これが、私が制作コーナーに座るっていうことなんです。

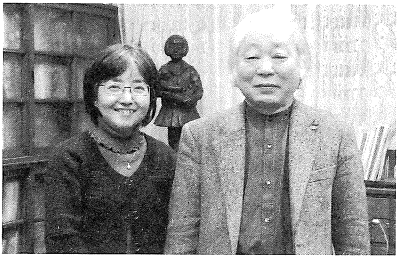
大人は最後はいなくなる

小川　この遊びの先としては、例えば制作コーナーにいるでしょう？　僕はね、時が来たら「あそこから、ふけろ」って言っている。「ふけるチャンスをつかめ」って。つまり、先生がいなくても、子どもたちで遊びだすという時点が出来たら、「全部引き

揚げろ」ということを言っています。なかなか引き揚げるチャンスってないんだけどね。

つまり、自分が遊び保育論として構築してきたのは、共通に子どもがある楽しい時間を過ごさなくてはいけないからで、そうなったら、どんどん梯子外していけというのが、私の考え。でもそこまでの保育をなかなか見ることができないんです。基本的に、ストリートプレイが遊びの原点だとすると、最終的には、大人（保育者）が抜けるのです。いなくなるっていうことが大事で、周りで見てて「俺の出る幕ないよね」って大人が言えたら、これは最高だと思う。そこの理論をどう構築するかっていうことは、自分の頭の中にあるけど、それは現場の先生に、なかなか言えてない。

年々、子どもたちが今の情報化社会の中で、要するに受け身になっているから、自分の遊びのストーリーが出来なくなっている。昔はよく遊んだよ。でも年々遊ばなくなっている。なぜか。保育者自身が遊んだ経験がないのだから。積み木一つあればいろんな世界が出来る、っていう時代から、みんなほとんど電動おもちゃで遊ぶ、さらにはパソコンプレイの中で遊ぶようになっているんですよ。電池が切れると遊べない。そういう時代の中で、どうしたら子どもたちが自分たち自身の世界を構築できるかっていうことを、大人たちが整備しながら、最初はあこがれの対象となって、おせっかいをしないで、必要な時にサポートして、必要な時に抜けるというような関係を構築しないと、遊びは持続しません。

浜口　始めのほうで、先生が、子どもの遊びに大人はお邪魔虫なんじゃないかって言われたこと、気になっていましたが、最後にその意味がよくわかりました。どうもありがとうございました。

（平成二十四年一月十六日）